

生徒の学びの実態に基づいた国語科言語活動のカリキュラム設計

研究代表者：和歌山大学教育学部 丸山範高

共同研究者：附属中学校 浜野杏・松田瞳

1. 研究の目的と方法

本研究の目的は、1年間を通じた中学校国語科言語活動のカリキュラム（学びの履歴）のあり方について、初任期教員と大学教員とによる授業研究を通して構想し、初任期教員が抱える課題解消の指針を得ることにある。

初任期教員の国語科授業は、教師による教え込み型の授業が減り、生徒一人ひとりの言語活動を尊重する授業が増えてきてはいる。しかしながら、生徒の主体的な言語活動を、1年間で、段階的に、どう発展・向上させるかについては、見取りきれていないままであるという課題が指摘できる。

そこで、本研究は、次の手順で研究を進め、1年間を通じた中学校国語科言語活動のカリキュラムのあり方について検討した。①大学教員が中学校国語科授業を参観し、生徒の言語活動に関わる学習実態を把握する。②大学教員と中学校教員が協議をし、1年間を通して取り組む言語活動のねらい・内容を確定する。③大学教員と中学校教員とでの授業検討会を重ね、中学生の言語活動の質を高めるカリキュラムに関する知見を共有する。

2. 活動の概要

(1) 授業観察・研究協議①

日時：2021年6月9日

授業者：松田瞳

対象：中学2年

教材：沼田英治「クマゼミ増加の原因を探る」（光村図書『国語2』pp.42-51.）

【授業概要】

- ・本文のうち、「まとめ」（p.49.）にあたる箇所を視写した。生徒の言語活動の様子について、視写活動は全生徒がほぼ同じペースで集中して活動に取り組んでいる。（個別学習）
- ・クマゼミ増加の要因について、図解したもの（p.49.）の空所補充をしながら内容の確認をする。（個別学習）
- ・「まとめ」（p.49.）について、前半段落と後半段落それぞれの意味づけを行い、前半がクマゼミ増加要因、後半が筆者の主張になることを押さえる。（一斉学習）

【協議内容】

- ・本単元は大きく2つの学習段階で構成されている。第1段階は教材文の内容を正確に理解することが目指され、本時の視写・図解などがそれに相当する。第2段階は教材文を批判的・相対的・多角的に評価することが目指され、ワークシートには、文章の書かれ方の工夫や問題点について根拠を提示して自分の考えをまとめる活動が示されている。
- ・視写活動は重要な言語活動の1つであるが、生徒たちが視写することの速さにばかり目を奪われることがないよう留意する必要がある。今後の課題は、視写活動によってどのような文章理解力を目指し、それをどう評価するか、その評価の観点を検討する必要がある。

- ・単に言語活動を授業に取り入れるだけでなく、その言語活動を支える国語学力（言葉の力）を概念化し、年間を通して繰り返し評価していくことが重要である。
- ・本単元をもとに想定される言語活動を支える国語学力として《批判的・多角的な対話》といったものが考えられる。

（２）授業観察・研究協議②

日時：2021年6月30日

授業者：浜野杏

対象：中学1年

教材：桑原茂夫「ちょっと立ち止まって」（光村図書『国語1』pp.46-51.）

【授業概要】

- ・〈展開1〉筆者の主張に当たる箇所を教材文の該当箇所に注目してまとめる。
- ・〈展開2〉教材文に掲載された3つの図それぞれについて、筆者が伝えたいことをまとめる。
- ・〈展開3〉3つの図の必要性について生徒それぞれが自分の意見をまとめ、その理由を説明する。その後、タブレットにより一部の生徒の記述内容を映写し教室で共有する。
- ・生徒の言語活動の様子について、〈展開1・2〉では教材文の記述に集中している様子が見られた。一方、〈展開3〉では、教材文の記述を離れ、生徒個人の感覚が全面に出た発言も目立つようになった。

【協議内容】

- ・〈展開1〉は文章全体を俯瞰して考える問いのため、〈展開2〉の後に扱ってもよい。
- ・〈展開2〉については、それぞれ教科書の記述を抜き出すのではなく、3つの図それぞれの共通性と個別性とをあぶり出すような発問をしてもよいと思われる。3つの図それぞれの共通性と個別性は〈展開3〉を深く考えることにつながる。
- ・〈展開3〉に関する発表では、「図1は準備運動！」「最初は有名なものを出しておいた方がいい」など、本文の記述を根拠とするのではなく、生徒の生活観・価値観を根拠とした発言が目立った。生徒の生活観・価値観を交流するだけでは、国語科＝言葉の学習が深まっていけないため、本文の言葉を根拠に発言できるような手立てがあってもよいと思われる。
- ・本単元をもとに想定される言語活動を支える国語学力として《根拠を挙げて書く》といったものが考えられる。今後、単元ごとに、目指す言語活動《根拠を挙げて書く》を取り入れ、生徒の書く力の変化を継続的に見取っていく。

（３）授業観察・研究協議③

日時：2021年7月14日

授業者：松田瞳

対象：中学2年

教材：大岡信「言葉の力」（光村図書『国語2』pp.74-77.）

【授業概要】

- ・〈展開 1〉意味段落 3 について、4 つのキーワードを含め、100～130 字で要約する。
- ・〈展開 2〉言葉に関する筆者の主張に対して、生徒一人ひとりが自分の経験と結びつけながら「美しい言葉」「正しい言葉」について意見（共感、違和感など）をまとめ、発表・共有する。

【協議内容】

〈展開 1〉について

意味段落 3 についての要約であったが、先生の解答例には 3 段落にはない 1 段落の表現「人間全体」が使われており、3 段落に注目していた生徒は混乱したかもしれない。また、キーワードとして取り上げた 4 表現について、生徒は、その重要性・必然性を理解しながら要約できていたか疑問が残る。したがって、今回の 3 段落のみに限定しての要約活動は本文の読解プロセスとしてやや無理だったように思われる。改善策として次のような展開が考えられる。①[前時]桜の花びらと言葉との類比関係（および類比関係であることの必然性・具体的内容）を文章全体の枠組みとして捉える。②[本時]類比関係に留意しながら、本文全体を要約する。

〈展開 2〉について

- ・意見の書き方として、筆者の考え方に賛同する、あるいは、違和感を持つなど、多様な立場で書くよう支援できていた。こうした先生の働きかけは、生徒が批判的に多角的に文章を読む習慣をつけることにつながり、重要である。年間を通じて意識づけておくとうよい。
- ・生徒の記述は、抽象的な記述にとどまっているものも散見される。どのような言葉がどんな場面で、なぜ美しかったり正しかったりするのかわかり、自分の経験をより具体的に説明させると学習の広がり深まりが期待できる。
- ・次時以降に、模範となる生徒の記述例を数例提示し、その書かれ方を解説し、書き方の枠組みをイメージさせておくとう書く力の向上につながると思われる。

（4）2 学期の授業についての事前検討会

日時：2021 年 8 月 6 日

内容：2 学期に行う予定の教材の単元構想について協議した。中学校 1 年「蓬萊の玉の枝—『竹取物語』から」、中学 2 年「君は『最後の晩餐』を知っているか」それぞれの教材について、生徒の主体的な言語活動の質を高める単元のあり方について検討した。

3. 研究の成果と課題

本研究では、初任期の中学校国語科教員 2 名と国語科教育を専門とする大学教員とで、国語科授業における言語活動のあり方について協議を重ねてきた。その結果、中学生一人ひとりの言語活動を尊重しつつも、その活動の質を高めるカリキュラムのあり方について指針を得ることができた。

質の高い言語活動を行うためには、確かな言葉の力に裏打ちされた活動を意識する必要がある。本研究では、1 年生については《根拠を挙げて書く》言語活動、2 年生については《批判的・多角的な対話》といった言葉の力を意識した言語活動に取り組んだ。生徒たちの学習状況として、1 年を通して次のような変化が見られた。

・1年生《根拠を挙げて書く》

1年生の生徒たちは、もともと、よく考え自分の意見を持つことができていた。また、その意見の中にはユニークな想像力を持っている者も見られた。しかしながら、なぜそう考えたのかを問うても答えが出なかったり、その説明に説得力に欠けていたりすることが課題であった。

1年間の授業を通して、意見には根拠がなければ説得力に欠けることを、多くの生徒たちが理解できてきていると評価している。たとえば、生徒同士の何気ない会話の中で「その根拠は？」と聞いている場面を多々目にした。意見を書くだけでなく話す時にも根拠を明確にすることが意識されているのだと考えられる。

・2年生《批判的・多角的な対話》

2年生の生徒たちは、もともと、全体として、文章を正確に読み取り内容を理解する力については低くない状況であった。しかしながら、読み取ったことから自分の考えを持ち表現することに苦手意識を持つ生徒が多いという課題があった。

1年間の授業を通して、教材文の内容や友達の意見を《批判的・多角的》に見つめ意見をまとめる活動を繰り返し行うことで、無回答の割合や自分の考えを表現することに抵抗感を持つ生徒が確実に少なくなった。内容の程度に差はあるが、一定程度の自分の考えを多くの生徒が持つことができるようになったと考えられる。また、一部の生徒の優れた意見を共有することで、徐々に内容の充実度も上がったように感じられる。さらに、比較したり、自分の体験と結びつけて意見を述べたりといった、自分の意見を形成する際の思考の手立てが教室全体に浸透してきたようにも見取ることができる。

1年生・2年生とも、基礎学力の充実した生徒たちではあるが、言語活動を充実させるための方略を意識しきれていた生徒は少ない状況であった。本研究を通して、《根拠を挙げて書く》《批判的・多角的な対話》を試みるといった思考方略を意識した言語活動に1年間取り組むことで、多くの生徒たちは言語活動を充実させるための指針を獲得しているのではないかと考えられる。

今後の課題としては、言語活動の質をさらに充実させるために、より多様な思考方略を活用した言語活動を積極的に授業に取り入れ、生徒たちの学習状況を継続的に見取っていくことが求められる。